

## ここまで分かった！佐賀の忍者史

佐賀戦国研究会 代表 深川 直也

はじめに

### 【キーワード】

佐賀県 戦国時代 境目 嬉野市 国衆 龍造寺氏 鍋島氏 神代氏 筑紫氏 策略 忍 火薬の技術  
放火 城攻め 修験道 武術 剣術 山伏 蓮池藩 細作 長崎街道 情報 幕末 長崎 異国船

### 【忍者の定義・忍者とは】

情報収集が主たる任務。間諜、間者、スパイ。工作人員。忍術を使用する者。

日葡辞書<sup>1</sup>「Xinobi」の用例「Xinobiuo suru」により、“忍びをする”者。

忍の仕事は、忍び“が”するもの（専任）とは限らず、忍び“を”する者が忍者と考える。

※吉丸雄哉先生からの御教示によれば、戦国期の臨時の任務 → 江戸時代の組織編成された職業・・・、  
厳密には、時代によって定義は変わると考えられる。

### 【忍術とは】 総合的知識に基づくサバイバル術。

山田雄司先生の定義<sup>2</sup>に基づく。「忍術書には、心構え、侵入術、破壊術、武術、変装術、交際術、対話術、記憶術、伝達術、呪術、医学、薬学、食物、天文、気象、遁甲(とんこう)、火薬など多様な記述がなされている。何事にも耐え忍び、人間の気質や自然環境、社会環境を掌握する(術)」。

### 【佐賀県(佐賀市を中心に)の南北朝時代～江戸時代、権力交代の様子】<sup>3</sup>

(南北朝) 今川氏 & 千葉氏 → (室町中期) 千葉氏 → (戦国初期) 少弐氏・千葉氏  
→ 少弐氏・大内氏・有馬氏 → (戦国中期) 大友氏(宗麟)・龍造寺氏 → (安土桃山時代) 龍造寺氏 →  
→ (江戸時代) 鍋島氏 → 佐賀鍋島藩、三支藩成立。(佐賀本藩、小城藩、鹿島藩、蓮池藩) → 幕末へ

---

<sup>1</sup> 『邦訳 日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実 編訳、岩波書店 発行 (1980 年 5 月発行) P.771

<sup>2</sup> 『忍者の歴史』山田雄司 著、(株) KADOKAWA 発行 (2016 年 4 月発行) P.9~P.16

<sup>3</sup> 『戦国・織豊期の権力と社会』本多隆成 編 吉川弘文館 発行 宮島敬一論文 (1999 年 9 月) P.106

『佐賀藩の総合研究』藤野保 編 吉川弘文館 発行 (1981 年 2 月)

★時代順、佐賀の忍者列伝 ( 原文の雰囲気をご鑑賞ください。 )

【1】「間者」・無名 / 龍造寺隆信配下。離間計の遂行者。天文 22 年 8 月

「伝に曰く、此時神代方へは隆信と小田、江上と内通有て神代を倒さんとすべき術也と。拵へ又小田、江上へは神代と隆信と内通有て小田、江上を計らるべき術ありと。出家商父の雑説交々有し故、互に心を置き合て隆信帰城の時此三家出勢なく、隆信輒（たやす）く城に入しと也。若し神代、江上、八戸、高木、小田一致して戦はば、今度の帰城叶ふ間敷を。隆信之を了簡せられ間者を以て斯く所々に雑説を云はせられし也。是れ能き謀なり勝利公も後に称美し玉ひける。」（『神代家伝記』）<sup>4</sup>

【2】「間者」「内間」・小副川左衛門 / 神代勝利配下。天文 22 年 8 月～天文 24 年 8 月までの間

「(神代勝利は) 小副川何某と云ふ者に心を合せ態と科を設け、勘当して佐賀へ内間(※おそらく内間の翻刻誤り)の為にくだされけり。此者隆信を頼むの色を見ずして勤仕しければ、隆信山内へ案内の為に常に懇ろを加はれ所領を給りけり。此者の内外に付能く伺ひ、密符を以て勝利公へ時々告げる故、毎度隆信の術に落ち玉はず。(中略、その後、龍造寺隆信による神代勝利への不意討ち作戦の際、) 今度は隆信の不意なる術なる故に、内間之を知らず告げざりしかば(神代勝利の城は落城した。)」(『神代家伝記』) (『葉隠聞書 第六』<sup>5</sup>に同様の記述あり、間者と書かれている。)

【3】「草履取り」・無名(見事な七方出) / 神代長良(勝利の継嗣)配下。永禄 8 年 8 月中旬

「茲に又長良公の御草履取何某と言ふ者、偽りて狂気となり、様を変え山内を巡り戯言を云ひ囃し、或は人形を舞はしめ又は猿を使ひ、常に三瀬の城辺に至て窺ひける。彼の城番も之を呼びて様々に黽(なぶ)り翫(もてあそ)ぶこと度々に及び、後には心安く城に出入りしけるが、或時城番油断しける隙を能く見澄まし、急ぎ駈返り近所に有合う味方の浪人共へ告げたりしかば、即時に藤原山の内、西川寄合原に会合し、密かに会議を凝らし、草履取を城中に忍び入らせ、火を放たしむ。味方の浪人共之を見て、一度に鯨波を作りて押寄せ散々に攻め掛かる。城番は不意の事なれば防ぐべき様もなく、」(『神代家伝記』)

【4】「斥候」・無名 / 鍋島直茂配下。元亀元年 8 月

「或はいふ、此時信生(鍋島直茂)、宵より今山の(大友)八郎が陣へ斥候を遣しけるに、走り帰りて告げるは、豊後衆、明日は城乗とて大将も士卒も首途の祝、上下酒宴し、夜討などの事は努々思寄らず候、弥々御勢を急がるべしと申す。依りて信生、弥々力を得られしとなり。此斥候の士、成松刑部大輔とも、又秀島源兵衛が与力合満何某といふ者なりとも。」(『北肥戦誌』卷之十九)<sup>6</sup> P.61～P.62

【5】「間牒」・無名 / 鍋島直茂配下。肥前国杵島郡・須古城攻め、天正 2 年 3 月

「攻伐不自由、横辺田滞在弥月、鍋島氏通間牒於平井直秀、」(『泰巖公御年譜』)<sup>7</sup>

【6】「肥前の坊さん」(剣術指導・安楽平城) / 神代長良配下か。天正 7 年 3 月～9 月頃 ※口伝

・福岡市早良区脇山の古老・吉岡氏が語った口伝。肥前の坊さんが安楽平城主の嫡男、小田部九郎に剣術を教えにきていた。その内、諜報を目的に来るようになり、長らく籠城を続ける安楽平城の水の供給源を把握し、龍造寺方へ伝えた。龍造寺軍は池田の山伏を案内役に、城の水の手を急襲・破壊し、以後の籠城

を困難にさせた。/『安楽平城物語』<sup>8</sup>（その3）P.31～P.32（1979年5/27の記事とあり）

著者はこの坊さんについて、密偵に任じられた者ではないかという旨を指摘している。（P.34）

【7】「忍」・無名 / 鍋島直茂配下。天正7年（1579）3月下旬

「（小代）宗全は是を聞大に怒り、同名越前守と長臣荒尾摂津守家経に人数二千を副へ、芥田神と云所迄押寄る。（鍋島）直茂公兼て梅尾に忍を被入置者走り来り、此由り告るに依て、伏兵を被起、越前守を木下四郎兵衛討捕けり。荒尾は辛々遁れ、梅尾に引返す。直茂公の御勢、梅尾迄押詰、町小路に火を掛る。於爰宗全先非を悔降参す。是肥後衆御手に入初也。」（『隆信公御年譜』）<sup>9</sup>

【8】「忍」・無名 / 空閑三河守光家（可清入道）配下。忍衆を組織していた？ 天正8年6月下旬

「此空閑三河守、于時入道号可清、六百町を領し中佐嘉の内、測に在城す、常に忍びの上手を多く抱置、盗乱妨を指免して、無扶持に召仕し者也、其故に此時も、彼家人一番に城中へ忍び入り、大将小佐井を生捕りけると也、」『直茂公譜』（三）<sup>10</sup>

空閑三河守は龍造寺隆信の重臣（知行5千石程）で、度々武功を挙げ、隆信の信頼も厚かった。

【9】「茶売」・無名 / 筑紫広門配下（たまこ火のスキル） 天正11年3月7日

「天正拾壹年癸寅（未）三月七日之夜、甲待（庚申待）之時、筑紫家より為策略、茶売を仕立候而、岩屋に登せ申候、虚空蔵台より茶を売下、人目をはからひ、家の作相々にたまこ火をなげすてて大手迄、茶売体而下候而、其儘武蔵城之ごとく走入候、如此たまこ火仕廻候てより、帆足弾正方へ申候へば、則（筑紫）広門へ忠進申候へば、覚悟仕候人数打立候へと觸申候間、はや暮に成申候、然ば彼なげ火所々より焼立申候間、先焼申候所をけし二人数寄候へば、そこも焼こも焼あわて申候間、夜半程岩屋之家一つも不残焼落申候所に、筑紫衆乗取為可申、観世音寺辺迄人数を寄せ候へ共、宝満之衆かけ付被申候間、焼落申計に而引取申候、此由立花には八日朝巳ノ刻計に相聞へ申候間、」/『豊前覚書』 城戸清種 著、元和元年（1615）2月成立。信頼できる貴重な史料と評される。/『博多・筑前史料豊前覚書』 城戸清種 著 川添昭二・福岡古文書を読む会 校訂 文献出版 発行（1980年9月）P.34

【10】「忍にて見積り」・吉武弥右衛門 / 多久安順の陪臣（田代組の組子） 慶長5年8月中旬

「某共先祖吉武弥右衛門儀、廿歳にて高麗陣江、天叟（多久安順）様致御供罷立候、其節田代二良左衛門与に被相付候、其時分は五拾人与にて御座候、其後伊勢陣に相立候、然時津城御当り被成候間、津城懸り場夜忍びにて見積、二良左衛門方へ被仰付候、与よりは右弥右衛門老人相付候、城之間潮満川にて候間、某川之瀬踏可仕とかけ渡り、城廻見届、堀之様子見候得ば弱御座候間罷帰候、二良左衛門へ城懸り場能、堀弱候条、此方より御懸り可然由申候得共、其方斗にては無覚束候と被申渡候て、見被申候得ば、弥右衛門見如申候御座候故、右段々様子御前に被仰上、其後二良左衛門手引にて、此方御一手無別条、城を御乗取被成候、一方よりは何之宰相殿とやらん御懸り被成候由、関原相澄、其後柳川陣に罷立、已後与不相替、只今迄代々御奉公申上候事」/「田代長右衛門与 吉武六左衛門 吉武宇左衛門 吉武弥右衛門（連署）」由緒差出（元禄年間1688～1703年頃）『水江臣記』 卷第三 P.132 秀村 選三・細川章・多久古文書学校 編集校訂 文献出版発行（1986年11月）

【11】「忍之者」・無名 鍋島勝茂宛 細川忠利書状 (寛永14年)12月28日付

「一、原之城は人多と、我等は承候、其わけは新丸を二丸取出候由申候、人すくなにては左様には仕間敷候、もはや仕寄も近可有之候間、頃は様子も聞合申、おしこみ候共、事之外御人数損可申候、(闕字)上使之衆は如何御申付候哉、一、石火矢は内之かこい能候て、さのみ迷惑不仕由、承候、是又如何、一、城内へ忍之者など御入候事、定成かね可申候、但如何候、人数は何程内に御座候哉、落人など御座候はばしれ可申候、」『細川忠利文書 十四』3901号 (寛永14年)12月28日付 細川忠利→鍋島勝茂(佐賀藩初代藩主)宛書状(『大日本近世史料』・東京大學史料編纂所編) → 鍋島藩も忍之者を使役できた？

【12】「細作」・田原安右衛門良重 佐賀藩支藩・蓮池藩の侍 寛文7年

「寛文7年(1667)(中略)、是の年島原城主高力左近罪有り。国除かる。島原騒擾す。(鍋島直澄)公、田原安左衛門(安右衛門)をして細作となし島原に遣り、以て其の動静を探らしむ。安左衛門は才学有り。官塩田頭人に至り、嘗て蓮葉隠一部を著し後世に伝う。」 / 『蓮池日史略』第一卷<sup>11</sup>  
安右衛門は鉄砲足輕組頭や細作を務め、最終的に嬉野塩田役所の長官という高い地位に昇りつめた。

【13】「忍法」・彦山八天狗 弁慶夢想(伝林坊頼慶) 嬉野市に滞在し、タイ捨流剣術を指導。

先行研究上、山伏かつ剣術家の「彦山八天狗 弁慶夢想」と、伝林坊頼慶(肥後相良藩所属)は同一人物とされている。ただし頼慶が丸目蔵人の直弟子であるので、元禄の伝林坊は世襲数代後の人か(兵法タイ捨流 師範 山本隆博先生曰)。

「タイ捨の一流、佛の勸行と共に修行すべし、忍法修業も同じ、秘事を守り日夜の修行也。」

・「犬隠れの術」・「柴隠れの術」・「木の葉隠れの術」

「鎖の大事。ヒバカリ蛇を生きながら息を込めて黒焼きにして、成程粉にして持つべし。鉄鎖によし、身に付いても切れず、縄を腐らすによし、かたびらにも塗る也。」

「右の條々、忍の内、秘事なり。毛頭侘見・侘言これ有るまじきもの也。」

/ 『タイ捨流忍之内極意秘密之巻(写)』元禄2年3月<sup>12</sup>

【14】「内密の御用」「聞合方」・古賀源太夫 幕末期蓮池藩の下級武士、生没年不明。

諜報活動：嘉永6年8月～安政3年4月、主に異国船渡来の事情を探る任務であった。

安政2年正月時点での役職「御火術方」、安政2年6月時点での役職「御作事方」。

#### <14-1>

嘉永6年(1853)「(8月8日)外国船来航に依り成富謙兵衛・古賀源太夫を出崎せしめ事情を探索せしむ。」『蓮池藩日誌』P.569<sup>13</sup>

嘉永6年(1853)8月7日「大殿様江差上候事、附り先月十八日、長崎表へ魯西亜船渡来に付、内密為承り合、成富謙兵衛・・」『日記』(蓮池藩士著)一次史料<sup>14</sup>

(7月16日に、ロシアのプチャーチン艦隊が、長崎へ来航している。)

#### <14-2>

安政3年(1856)4月「古賀源太夫、去る寅七月イギリス船渡来聞合方御用・・」

「去る卯七月、長崎表へ異船渡来の砌、内密及(乃?)軍結彼地・・」

『請役所日記』(蓮池藩請役所 編・著)一次史料・未翻刻<sup>15</sup>

『請役所日記』の内容によると、安政元年 7 月にイギリス船が長崎に来航したとの情報を受け、蓮池藩から古賀源太夫が「聞合方御用」（諜報）のため、同 2 年 7 月に長崎へ派遣され活動開始。翌 3 年 4 月に、蓮池藩に帰還。（長崎滞在中、病気になり薬代がかさんだので、藩主に補償を申請している。）

（未翻刻文書の判読は、山田雄司先生にご協力を頂きました。）

★ 古賀源太夫が密命で長崎へ派遣されたタイミングは、

- ・ 1 回目は、嘉永 6 年 7 月、ロシアのプチャーチン艦隊が長崎港に入った時、
- ・ 2 回目は、安政元年 7 月、イギリス艦隊のジェームス・スターリングの来航をきっかけとして、安政二年 7 月、オランダ艦隊（スムービング号含む）のライケンが長崎に入った時期。

国籍不明の異国船が頻繁に長崎沖に姿を見せるようになり、佐賀鍋島藩において、長崎警備の任務が緊迫した状況となっていた。国防のため情報収集が重要であった事は論を俟たない。

おわりに

過去、忍者情報が判然としなかった佐賀県において、今は、忍やそれに類する者の情報が、嬉野忍者を含む 14 名分提示できるまでになった。この結果を“地方で忍者調査をしてみた一例”として共有したい。

- ・ 忍者を探すことは、郷土史研究に繋がる。

龍造寺隆信や鍋島直茂など「強い武将や組織は、何故強いのか？」と考える時、「用間」による巧みな策略や計略があり、情報収集力がある事を、上記までの事から指摘できる。つまり「武将や組織の強さ」とは何か。→ “忍”に類する者の活躍の事ではないか。今後も考察を深めたい。

- 
- 4 『神代家伝記』 享保年間（1716～1736 年）成立・長谷山観音禅寺住職 泰山 著/ 編纂物
  - 5 『葉隠聞書 第六』 享保元年（1716 年）頃成立・田代陣基 著 いわゆる有名な「葉隠」。
  - 6 『北肥戦誌』 正徳年間（1711～1715 年）成立・馬渡俊継 著/ 別名『九州治乱記』・編纂物
  - 7 『泰巖公御年譜』 貞享年間（1684～1688 年）頃に成立 / 漢文・龍造寺隆信一代記・編纂物
  - 8 『安楽平城物語』（その 3）石津司 著、史跡踏査と口伝等をまとめた自費出版（1978～1979 年）
  - 9 『隆信公御年譜』 貞享年中（1684～1688 年）成立 / 享禄～主に天正年間迄の龍造寺氏史・編纂物
  - 10 『直茂公譜』（三） 享保年間（1716～1735 年）成立・小川俊方 編 / 編纂物（佐賀鍋島藩公式）
  - 11 『蓮池日史略』 第一巻（佐賀県立図書館所蔵）永田暉明 編 1908 年頃（明治時代後期）までに成立。蓮池藩の役所日記「請役所日記」群から内容を編纂したもの。著者も幕末期蓮池藩士。
  - 12 『タイ捨流忍之内極意秘密之巻（写）』 元禄 2（1689）年 3 月頃 / 兵法タイ捨流門外秘文書
  - 13 『蓮池藩日誌』 福岡博 編（福岡博・森周蔵 校訂）蓮池商工会 発行（1981 年 4 月）三次的編纂史料
  - 14 『日記』（蓮池藩士著）幕末の一次史料
  - 15 『請役所日記』（蓮池藩請役所 編・著）蓮池藩の行政日記・一次史料

## 佐賀の忍者史 簡易年表

西暦	元号	出来事	備考
1553	天文 22 年	(1)「間者」/ 龍造寺隆信配下	隆信の村中城復讐戦、敵同士を離間計によって封じる
1555	24 年 弘治元年	(2)「内間」・「間者」・小副川左衛門 /神代勝利配下	神代家から放たれ、龍造寺家に家臣として入り込み、内部情報を随時密告
1565	永禄 8 年	(3)「草履取り」/神代長良配下	長良の三瀬城復讐戦。七方出の達人、謎の草履取り。
1570	元亀元年	(4)「斥候」/ 鍋島直茂配下	大友宗麟による第二次 龍造寺征伐。局地戦としての「今山の戦い」。斥候の他、山伏衆が夜道・山道を案内し、戦闘員としても活躍。
1574	天正 2 年	(5)「間諜」/ 鍋島直茂配下	須古城攻め
1579	7 年	(6)「肥前の坊さん」/ 神代長良配下 (7)「忍」/ 鍋島直茂配下	天正 6 年 耳川の戦い（大友氏衰退）以降、龍造寺家が勢力拡大。 龍造寺軍が肥後（熊本県）へ侵攻開始
1580	8 年	(8)「忍び」(衆) / 空閑三河守配下	龍造寺軍が筑前（福岡・博多方面）へ侵攻
1583	11 年	(9)「茶壳」/ 筑紫広門 配下  (たまこ火) の高度な技術	豊臣秀吉が大坂城を築く 龍造寺隆信、全盛期 / 筑紫広門、大友家と交戦
1584	12 年	沖田暁の戦い。 龍造寺隆信戦死。	龍造寺氏に大勝した島津家（鹿児島）が、九州制覇に王手を掛ける。
1600	慶長 5 年	(10) 三重県の津城の掛かり場を 「忍にて見積もり」・吉武弥右衛門	関ヶ原の戦い。7月～8月、龍造寺鍋島軍（5,000 騎程）は、毛利勝永軍と組んで伏見城攻め、安濃津城（津城）攻め。 奉行衆から感状をもらう。
1607	12 年	鍋島氏の佐賀藩（本藩）成立	龍造寺高房が死去。家中合議し、鍋島勝茂へ家督継承される
1637	寛永 14 年	(11)「忍之者」  肥後藩・細川忠利→鍋島勝茂宛書状	天草・島原の乱勃発。細川家と鍋島家で相談の音信が交わされる
1639	16 年	蓮池藩（支藩）創設	蓮池藩主・鍋島直澄（鍋島勝茂の五男）。嬉野塩田が、蓮池藩の経済拠点。
1667	寛文 7 年	(12)「細作」・田原安右衛門 / 蓮池藩士	幕府による諸国巡見使が九州へ。寛文 8 年、島原藩主高力氏が改易される
1689	元禄 2 年	(13)「忍法」・伝林坊（弁慶夢想）	『タイ捨流忍之内極意秘密之巻（写）』 中、犬隠れの術、柴隠れの術、他
1853	嘉永 6 年	(14-1) 8 月「内密」の御用・古賀源太夫 / ロシア艦隊の来航事情を探る	ペリーが来航、浦賀で開国を要求する。 7月16日、ロシアのブチャーチン艦隊が長崎へ来航。
1854	嘉永 7 年 11 月改元 安政元年	伊王島沖に国籍不明の帆船が頻繁に出没する状況となり、長崎警備が緊迫  （『池田半九郎日記』）	ペリーが再び来航し、日米和親条約（神奈川条約）を結ぶ。開国。 7月15日 長崎にイギリスのジェームス・スターリング艦隊が来航。8月29日に 出航。（『池田半九郎日記2』）
1855	2 年	(14-2) 7 月「内密」・「聞合方御用」・古賀源太夫 / イギリス船や他の異国船 渡来の事情探索の任務を受け、長崎へ派遣される。	6月 オランダ軍艦ゲデー号・ファビウス中佐と、同国スピン号、ライケン大尉が長崎に入港。 7月25日、佐賀藩主・鍋島直正がゲデー号に自ら乗り込み、船内を視察。 7月から8月にかけて、イギリス船、フランス船が来航。物資補給が目的。
1856	3 年	4 月 古賀源太夫が蓮池藩へ帰還。  長崎滞在中に病気になる、その薬代について、藩に補償を申請している	（『請役所日記』より）